

サミュエル・ベケットをめぐる三つの対話

—— 書誌的観点から ——

井上 善幸^E

1 ベケットと近世以前の哲学

M： 明治大学の図書館を最近よく利用するようになった。なかなか興味深い蔵書がたくさんあるね。

W： どのような書物がきみにとって興味深いんだい？

M： ぼくは人文関係が専門だから、そう、林達夫文庫とか、生田保存書庫といったところかな。

W： ふむ。林文庫が面白いというのはそれはそうだろうけれども、生田保存書庫とはまた！どのような点で面白いのかな。

M： 古い文献が結構まとまって保存されているという印象を受けている。いま **1953** 年にパリで初演された『ゴドーを待ちながら』で一躍脚光を浴びたサミュエル・ベケット (**Samuel Beckett:1906 - 1989**) という、アイルランド出身の作家のことをいろいろと調べているのだけれど、いやあ、実によく利用させてもらったし、いくつか面白い事実も発見することができたよ。

W： どんな事実が発見できたのか伺おうか。

M： やはり最大の発見は、ベケットにおける近世以前の思想の重要性ということだね。ベケットはこれまで様々な哲学者、思想家との関連でよく

^Eいのうえ・よしゆき / 理工学部助教授 / 英文学

論じられてきたけれども、従来どちらかといえば近世哲学との関連を指摘する研究が多かった。

W： そうだね。よく耳にするのはデカルトとか、ゲーリンクス、パスカル、マールブランシュ、ライプニッツといったところだよ。なぜそうなったのかな。

M： いろいろ考えられるけれども、たとえば最初に彼の著書となった詩集『ホロスコープ』だが¹、これはデカルトの内的独白というスタイルを取っている。それに最初に出版された彼の長編小説は『マーフィー』とって²、コミカルな思想小説といった評価がなされもしたのだ。その研究の初期の代表的なものの一つが、サミュエル・ミンツの『マーフィー』論だ。そこで彼はこの小説は「17世紀思想史を背景として読まねばならない」と述べ³、ゲーリンクスの重要性を説いている。またモダニズム研究などで有名なあのヒュー・ケナーが、ベケットの批判的研究を1961年に上梓したとき、そこにはなんとベケットが初めて活字にした「ダンテ...ブルーノ・ヴィーコ...ジョイス」というジョイス論が年譜に収められていないという信じられないような事実がある程度影響を与えている可能性がある⁴。

W： なるほど。その「ダンテ...」を少し説明しておいてくれたまえ。

M： うん、ベケットが若い頃最も影響を受けた同郷の作家ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』論なのだ。当時はまだ一部しか書物になっていなくて⁵、雑誌『トランジション』に「進行中の作品」として連続掲載されていたものを、それこそダンテ、ブルーノ、ヴィーコなどとの関連で論じているのだ。ダンテを言語論とからめ、ブルーノを反対命題の一致とモ

¹Beckett, Samuel. *Whoroscope*. Paris: The Hours Press, 1930.

²Beckett, Samuel. *Murphy*. London: George Routledge and Co., 1938.

³Mintz, Samuel I.. "Beckett's *Murphy*: A 'Cartesian' Novel". *Perspective*, 11 (Autumn 1959): 156.

⁴Kenner, Hugh. *Samuel Beckett: A Critical Study*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1961. New Edition 1968, p. 26.

⁵For example, Joyce, James. *Anna Livia Plurabelle*. With a Preface by Padraic Colum. New York: Crosby Gaige, 1928. See Slocum, John J., and Herbert Cahoon. *A Bibliography of James Joyce. 1882-1941*. New Haven: Yale University Press, 1953, pp. 41-44.

ナドの関連から、ヴィーコを循環する歴史として論じ、ジョイスのエクリチュールは何かについてではなく、その「何かそのもの」だと言うのだ。これは他のジョイス論などとともに一冊の書物として**1929**年にパリの書肆シェイクスピア・アンド・カンパニーから出版されたもので⁶、二年前に東京で開催されたある国際古書即売会では**18**万円の値が付けられていた（図版**1**参照）。こんな貴重な書物が和泉に何気なく所蔵されているのだから、驚きだね。ベケットを研究する上で、極めて重要なテキストであるにも関わらず、ケナーの年譜には収められていないというのは実に奇妙なことだ。そしてケナーはデカルト、ゲーリンクスといった確かにベケットとの関連で重要なカルテジアンたちを論じてゆくのだ。

W：　じゃあ、君はそれを無視したことがベケットを近世哲学へ傾斜させた罪を犯した、といたいのだね。

M：　まあ、（ためらいがちに）そうだ。もちろんベケットと近世哲学との関連を無視してよい、と言いたいのでは全くない。そちらヘドライブがかかりすぎてきたと言いたいのだ。

W：　なるほど。それはそれで面白い研究上の問題だろうけど、今回の蔵書の活用法と少し関係ないのじゃないかな。

M：　ところがそうでもないのだ。たとえばこの「ダンテ... ブルーノ」という評論だけど、この間にあるドット、すなわち「...」は何だと思う。

W：　たしか以前、それは作家の間に介在する世紀、すなわちダンテとブルーノとの間に三世紀、ヴィーコとジョイスの間に二世紀、といった意味だと聞いたような記憶がある。

M：　そう、それをベケットは**1970**年に出版された、彼の作品や批評関係の書誌を一冊の書物に編んだフレッチャー＆フェーダーマンにそう語ったとされる⁷。これは実に詳細な書誌で、ぼくも重宝している。**70**年まで

⁶ Beckett, Samuel. "Dante... Bruno. Vico..Joyce".
Our Exagmination Round His Factiâcation For Incamination Of Work In Progress.
With Letters of Protest by G. V. L. Slingsby and Vladimir Dixon. Paris: Sylvia
Beach, Shakespeare and Company, 1929.

⁷ Federman, Raymond, and John Fletcher.
Samuel Beckett: His Works and His Critics. Berkeley/Los Angeles/London: Uni-
versity of California Press, 1970, p. 4.

しかカヴァーできないけど。でもなぜドット一つが一世紀を意味することになるのか考えたことがあるかい。

W： そう言われてみると困るね。

M： そこで生田保存書庫の蔵書が登場するわけだよ。ジョン・バーネットというギリシャ哲学の有名な研究家がいる、かれの著書『ギリシャ哲学』によると⁸、ピュタゴラス派にとり最初の四つの数字の総和「**1 + 2 + 3 + 4 = 10**」はあらゆるものの根源で「テトラクティス」と呼ばれ、教団のメンバーはこれを用いて誓いを立てたという。それは三角形を用いて図（図版2参照）のように記され、この小さな点は小石を表していると考えられたのだ。実際『マーフィー』にはそれへの言及が見られる。そもそも「計算」(**calculation**)という言葉には、この「小石」が語源として含まれている。ベケットの「ダンテ... ブルーノ・ヴィーコ... ジョイス」におけるドット一つが百年を表わすとベケットが言うとき、彼はこの哲学の伝統を受け継いでいると考えられる。このバーネットの書物の初版は**1914**年だが、再版が**20**、**24**、**28**年にそれぞれ出ている。生田にあるのは**28**年の版で、マクミランから上梓された天金の美しい書物だ。ベケットが参照したのはこのエディションの可能性もあるね。というのも、一昨年出版されたJ・ノウルソンの伝記を見ると⁹、彼の蔵書には、彼が学生時代を過ごした**20**年代に出版、購入された書物がかなりあるからだ。いずれにせよ、ベケットはこれらのうちのどれかの版でこの書物を読んでいたとぼくは確信している。

W： うーん、それだけでは納得しかねるね。

M： こんなこともある。『マーフィー』にはピュタゴラス派のニアリーという人物が登場するが、彼は自分の心臓に関して「アブモニア」という概念を提出し、「《アブモニア》と呼ぶことに飽きると、彼はそれを《アイソノミー》と呼んだ。その《アイソノミー》という音の響きにもうんざりすると、今度はそれを《アチューンメント》と呼んだ。」（『マーフィー』

⁸ Burnet, John. Greek Philosophy: Part I Thales to Plato. London: Macmillan, 1928. First Edition 1914.

⁹ Knowlson, James. Damned to Fame: The Life of Samuel Beckett. London: Bloomsbury Publishing plc, 1996, pp. 838-46.

川口喬一訳 白水社)とある¹⁰。これらの言葉はすべてピュタゴラス派から来ているのだ。ピュタゴラス派は、体のあるピッチに弦を張った楽器ととらえ、調子が合っていると健康と見なし、弦が張りすぎていたり弛みすぎていると病気になると考えた。この派の医療学派の代表であるアルクマイオンによると、健康は体の中の対立するものの「アイソノミー」つまり「同権」に依存する。健康とは対立するものを正しく混ぜ合わせる事に依拠し、これはつまり「アチューンメント」＝「楽器を調律すること」(ギリシャ語で「アブモニア」)なのだ。しかもこの説明は、まさにバーネットの『ギリシャ哲学』のあるページにすべて出ているのだ¹¹。これを見つけたときは本当に驚いたよ。ベケットは間違いなくこの書物を参照している。そのヒントを与えてくれたのがS・ケネディーの『マーフィーのベッド』だが¹²、もう少し調べてみると、少々がっかりしたことを告白するがね。R・ラビノヴィッツが『サミュエル・ベケットの小説の発展』で同じことを指摘していた¹³。とくにラビノヴィッツはピュタゴラスに関してはおそらくベケットの種本であろうとまで述べているけれども、ぼくもほぼ間違いないと思っている。

W： でも懷疑主義的側面を濃厚にもつ作家を研究するには、少し楽天的な決めつけ方だと皮肉りたい気がするね。

M： そうか。ではあらたな一撃を加えよう。ベケットの『マーフィー』がすったもんだの末、ロンドンで出版されるのが**1938**年。この年から翌年にかけて彼はフランス語で「二つの欲求」という創作論を執筆する¹⁴。そこに奇妙な図形のことが述べられている。

W： それが今のバーネットと何か関係があるのかな？

¹⁰ Beckett, Samuel. *Murphy*. New York: Grove Press, 1957, pp. 3-4.

¹¹ Burnet, Greek *Philosophy*, p. 50.

¹² Kennedy, Sighle.

Murphy's Bed: A Study of Real Sources and Sur-Real Associations in Samuel Beckett's First Novel. Lewisburg: Bucknell University Press, 1971, p. 302n1.

¹³ Rabinovitz, Rubin. *The Development of Samuel Beckett's Fiction*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1984, pp. 99-100 & 217.

¹⁴ Beckett, Samuel. "Les Deux Besoins".

Disjecta: Miscellaneous Writings and a Dramatic Fragment. Edited with a foreword by Ruby Cohn. New York: Grove Press, 1983, pp. 55-57.

M： まあ待ちたまえ。そこには火のまわりを廻るモナドへの言及 — 実はこれもピュタゴラス派の思想なのだが — があったり、二つの三角形を上下逆に重ね合わせてその図形をもとに「欲求」について論じたり、問いの連続そのものが作品となるといったベケット哲学を展開する、なかなか読みづらいテキストなのだ（図版3参照）。

W： なるほど、それで？

M： そして後半三分の一ほどで突然正十二面体のことが出てくる。

W： どうやら核心に迫ってきたようだね。

M： そこには正十二面体を作ろうとすればどうしても無理数の導入が必要になることが述べられている。そしてこの正十二面体をベケットは「神の形象」と呼び、ピュタゴラス派の一人であるヒッパソスはその暗い秘密を公開したためにリンチを加えられて下水渠で溺死したのだと言う¹⁵。これとほぼ同一の内容がまたまたバーネットの『ギリシャ哲学』の「ピュタゴラス」の項で述べられているのだ¹⁶。しかもここにも図形が登場するが、ただそれはベケットの図形とは異なり、3つの3角形を星形に重ねたものが描かれている（図版4参照）。これはピュタゴラス派の間ではペンタルファ、あるいはペンタグラムと呼ばれ、ピュタゴラス派の秘密の一つとされ、後代になっても魔術の目的で使用されたりした。正十二面体を作るとは球体を作図することとほぼ等価であるとバーネットは述べている。つまりベケットは正十二面体という図形が球体に最も近い図形であることをおそらくバーネットの書物を通して知っていたという事になるね。でなければ「神の形象」などと言うことは不可能だからね。慎重に「球体」という言葉を避けてはいるけれども、ベケットは明らかにそれを意識していたと考えられる。

W： なるほど。しかしそれにしても、バーネットの書物には三つの三角形を星形に重ねたペンタルファが描かれているのに、なぜそれが「二つの欲求」では二重の三角形からなる星形六角形なのだろう？

¹⁵ Beckett, *Disjecta*, p. 56. 岡室美奈子「ベケット迷宮 - 『クワッド』のイコノロジー」中央大学人文科学研究所編『現代ヨーロッパ文学の動向 - 中心と周辺』（中央大学出版部、1996年）176 - 81頁。

¹⁶ Burnet, *Greek Philosophy*, chap. 2, sec. 36.

M： うん、それだけだね、カバラ占いでベケットの誕生日を計算すると彼の数は六なのだね。それで六角形にした、というのは半分冗談で、これはカバラにおける「妊婦と子供を守る魔除け」の図に用いられるものと酷似している。「ダビデの楯」とか「ソロモンの封印」と呼ばれたりするものだね。しかもこの図においては中心に神が位置すると考えられている。そしてそのまわりに同心円が描かれている（図版5参照）¹⁷。ここでもやはり円、もしくは球体に出会うわけだよ。ベケットは『マーフィー』執筆に際して相当な量のノートをとっていた。その時のノートは英国のレディング大学のベケット・アーカイブに保存されている¹⁸。そこでは占星術はもちろん、錬金術のことも記されていると思われる。ある友人に宛てた**1936年11月13日**付の書簡の中でも「精神のヘルメス主義」という表現さえ用いているほどだからね¹⁹。占星術に関しては、『ブリタニカ百科事典』の第**14**版の項目を調べたことが判明している²⁰。いずれにせよ、ベケットは正十二面体を語りつつも球体を制作しようと考えていたと思われる。そして「二つの欲求」という創作論は、バーネットの『ギリシャ哲学』を下敷きにしつつ、それとカバラ思想とを合体させたものである可能性があると思うのだ。

W： 球体か。

M： そう。それを説明しようとする、プラトンの『パイドン』およびプラトンの宇宙論とも言える『ティマイオス』にも触れる必要がある。プラトンによれば宇宙は十二片の革を縫い合わせた鞠のようなもので、それに最も近いのが正十二面体であるとした²¹。日本でも岩波文庫からでている『ソクラテス以前以後』という著書のあるコーンフォードに『プラトンのコスモロジー』という書物があり、これまた生田保存書庫にあって、

¹⁷ 箱崎総一『カバラ ヨダヤ神秘主義思想の系譜』（青土社、1986年）113頁。

¹⁸ MS 3000, Notebook with dark red covers, inscribed on the front cover in capitals 'WHOROSCOPE' 11x17cm. 'Seventh Supplement to the Catalogue of the Beckett Archive'. Reading, England, N. D.

¹⁹ Beckett, *Disjecta*, p. 103.

²⁰ Pilling, John. 'From a (W)horoscope to Murphy'. Pilling, John, and Mary Bryden (eds.). *The Ideal Core of the Onion*. Reading: Beckett International Foundation, 1992, pp. 1-22.

²¹ プラトン『ティマイオス』種山恭子訳（岩波書店、1975年）(55c)。

ロンドンで出版されたのが1937年、つまり『マーフィー』が出版される前年だ。この本は『ティマイオス』の英訳及びその詳しい注釈書といった性格の書物で、『ティマイオス』を翻訳する人の必読文献の一つだけでも、そこでもこの正十二面体のことが言及され、それこそが体積においてもっとも球体に近いことが述べられている²²。それにそこにはなんと、四角形を交差する対角線で四分割している図形が掲載されているのだ（図版6参照）。

W：それが何か？

M：なにを隠そう、これと同一の図形をベケットは80年代に入って『クワッド』の中で図示し（図版7参照）、四人の演技者がどのようなコースを通過して闇に消えてゆくかの順序を与えているのだ²³。

W：ということは？

M：これはまだ試論だけれども、ベケットはあの四角形を用いて神である球体を創造しようとしたのではないかと思うのだ。

W：しかしベケットは、神の不在の時代の作家ではないのかな。ゴドーはいつまでたっても来ないのだから。

M：それはどうだろう。結論から言ってしまうと、そうではないとぼくは読んでいる。『ゴドー』の神は、内在し、かつ超越しているのだよ。『マーフィー』の第六章は「マーフィーの精神」を扱った有名な章で、そこでベケットは「マーフィーの精神は外部宇宙に対してヘルメス的に閉ざされた巨大で虚ろな球体である」と表現している²⁴。これが主人公マーフィーの小宇宙だとすれば、それに対応する大宇宙がシーリアの叔父にあたるケリー氏の揚げる風の舞う空だ。この風は何もない大空を舞う。それをベケットは「染み」と表現しているが²⁵、これは恐らくケノンとアトムから

²²Cornford, F. M..

Plato's Cosmology - The 'Timaeus' of Plato translated with a running commentary.

London: Routledge & Kegan Paul, 1956. First Edition 1937, pp. 218 -19.

²³Beckett, Samuel. Quad. Collected Shorter Plays of Samuel Beckett. London and Boston: Faber & Faber, 1984, pp. 291-94.

²⁴Beckett, Murphy, p. 107.

²⁵Beckett, Murphy, pp. 25 & 279.

成り立つデモクリトスの原子論を踏まえていると考えられる²⁶。そして興味深いことに、この風がまさに星形六角形をしているのだ²⁷。ベケットはあの「二つの欲求」の図形によってアトム、あるいはモナドを暗示し、さらにそれを包み込む同心円の球体を創造しようとしていたのではないか。ぼくの考えではこの球体が『クワッド』にも、さらには**1981**年にオハイオ州コロンバスで初演された『オハイオ即興劇』にも生きていると思うのだ²⁸。

W： うーむ、なかなか難しくなってきたぞ。『マーフィー』出版が**1938**年だから、もし**40**年以上も距たってベケットがそのようなことを考えていたとすれば驚きだ。ではどのように生きているのか訊こうか。

M： そうくると思った。でも今回は別の機会に譲りたい。というのも、それに関しては現在執筆中なのでね。ここではベケットにおいていかに球体が重要かを思想的に少し確認しておくだけにとどめよう。

W： ボルヘスに「パスカルの球体」というエッセイがあるよね、**1951**年の日付を持つ²⁹。

M： そうそう。あれは短いながらも、球体を隠喩として、クセノファネスから初めて、ヘルメス・トリスメギストス、ダンテ、ブルーノ、ラブレール、『薔薇物語』、百科事典『三重の鏡』、パスカルなどにおける球体の隠喩の変遷を追ってみたようなものだね。

W： そう。ボルヘスは実に楽しそうに書いている。

M： うん。そしてベケットだってそのような球体を描いている。例えば**32**年に執筆されながらも最近になってようやく出版された『並には勝る女たちの夢』にも、球体という言葉こそ出てこないけれども、ぼくの見るところ、聖ボナヴェントゥラから引用した球体のイメージが登場する。「内

²⁶ Mooney, Michael E.. "Presocratic Scepticism: Samuel Beckett's Murphy Reconsidered". ELH, 1982, Vol. 49, pp. 214-34.

²⁷ Beckett, Murphy, pp. 115 & 277.

²⁸ Beckett, Samuel. Ohio Impromptu. Collected Shorter Plays, pp. 283-88.

²⁹ Borges, Jorge Luis. "La sphère de Pascal," Œuvres complètes. Paris: Gallimard, 1993, pp. 676-79. ホルヘ・ルイス・ボルヘス『異端審問』中村健二訳（晶文社、1982年）15 - 19頁。

在しかつ超越し、全体ガスベテノ内ニアリ、いいかな、ソシテスベテノ外ニアリ、中心が遍在して円周が存在しない」という部分だね³⁰。『ワット』における壊れた円と円を喪失した中心を描いた抽象絵画に似た絵も³¹、ダンテの『天国篇』との関連で考えてみたい(図版8参照)³²。すべてに通底するものは円、球体のイメージなのだ。

W：なるほど。ベケットと神秘思想ということかな。

M：そう考えてもよいかもしれない。とくにそれを球体のイメージを中心に追ってゆくことが可能であろう、と。

W：そうするとG・プーレ辺りは重要になってきそうだね。

M：その通り。ばくも今回は彼の『円環の変貌』には大変お世話になった。とりわけ球体との関連で言えば、その「序論」がきわめて重要になってくる³³。ボルヘスではないが、まるで無意識的な球体の系譜がそこでは連綿と続いているような印象を持つのだよ。このプーレの「序論」など、まるでボルヘスの「パスカルの球体」への長い注釈のようにも思えてくるのだ。因みにボルヘスはあのテキストの中で一つの悪戯をおこなっているね。Z・トゥルヌールの古文書学版を41年パリ刊と記しているが、これは正しくは42年の間違いだ³⁴。それは恐らく意図的なのだと思う。というのも彼によると、パスカルは「無限の球体」と記すべき所を、原稿では「恐るべき(eâroyable)球体」と記していた、と述べている。しかしそんな

³⁰ サミュエル・ベケット『並には勝る女たちの夢』田尻芳樹訳(白水社、1994年)46頁。
Beckett, Samuel. *Dream of Fair to middling Women*. Edited by Eoin O'Brien and Edith Fournier. Dublin: Black Cat Press, 1992, p. 35.

³¹ Beckett, Samuel. *Watt*. Paris: Olympia Press, 1958, pp.141-42. First Edition 1953

³² ダンテ『神曲 [天国篇]』壽岳文章訳(集英社、1974 - 76年)第14歌、第29歌。See also Dällenbach, Lucien. *Le récit spéculaire*. Paris: Éditions du Seuil, 1977, pp. 133-38.

³³ Poulet, Georges: *Les metamorphoses du cercle*. Paris: Plon, 1961, \Introduction". ジョルジュ・プーレ『円環の変貌』(上・下)岡三郎訳(国文社、1990年)。

³⁴ Tourneur, Zacharie.
Pensées de Blaise Pascal. Edition paléographique des manuscrits originaux conservés à la Bibliothèque Nationale (No 9202 du fonds français) enrichie de nombreuses leçons inédites et présentée dans le classement primitif avec une introduction et des notes descriptives. Paris: J. Vrin, 1942.

記述は見当たらない。パスカルは「驚くべき (*étonnante*)」と記していたに過ぎない³⁵。客観的なエッセイを記しているように見せながら、そこに秘かな罅を導入している。なかなか面白い。まあそんなこんなで、ベケットをその系譜で捉えることは極めて肝要な作業であろうと思い鋭意執筆中なのだ。

W： そうか、では期待するでしょう。

2 ベケットとマリオネット

W： ほかにきみにとって明治大学図書館の興味深い蔵書は？

M： 林文庫の『イエイツと能』という書物に出会えたときは嬉しかった。ドルメン・プレスというダブリンの書肆から **1966** 年に刊行されたもの。**Hiro Ishibashi** という日本人研究者によるものだ¹。実に興味深い図版が多く掲載されている。鈴木大拙をイエイツが読んでいたり、色々と日本との関連があることを教えられた。

W： イエイツか。なにかベケットとの関連は出てくるのかな。

M： たくさん。同じアイルランドのプロテスタント系の作家であるばかりでなく、ベケットは亡くなる直前、イエイツの後期の詩「塔」をすべて暗記していて、ケナーに朗読してみせたというエピソードもあるし²、ベケットがトリニティの学生だった頃 – **20** 年代後半だが –、アベイ座でイエイツの芝居をいくつか見ている³。それにイエイツとゴードン・クレイグとの関係は非常に重要で、彼を通してマリオネットの系譜がベケット

³⁵ See Pascal, Blaise.

Pensées sur la religion et sur quelques autres sujets. TEXTES. Introduction de Louis Lafuma. Paris: Editions du Luxembourg, 1952, p. 135.

¹ Ishibashi, Hiro.

Yeats and Noh: Types of Japanese Beauty and Their Reception in Yeats's Plays. Edited by Anthony Kerrigan Being No. VI of the Dolmen Press Yeats Centenary Papers. MCMLXV. Dublin: Dolmen Press, 1966.

² Roche, Anthony. *Contemporary Irish Drama: From Beckett to McGuinness.* Dublin: Gill & Macmillan, 1994, p. 14.

³ Knowlson, James. *Samuel Beckett: An Exhibition.* London: Turret Books, 1971, p. 23.

にも流れ込んでいる可能性がある。クレイグに関しても図書館には大変お世話になった。林文庫所蔵のJ・リーパーの『E・G・クレイグ』の中の挿絵のいくつかは論文に利用させてもらったし⁴、和泉にはクレイグがフロレンスで編集、出版していた雑誌『マスク』の復刻版が所蔵されていて、主だったものは書誌を作成していつでも参照できるようにした。クレイグは芝居ばかりでなく、書物にも興味を抱き、自身で蔵書票を制作したりしている⁵。だから出版にも興味をもったのだろう。そんな彼はとりわけマリオネットに関心があり、それに関連する記事が非常に多い。「日本のマリオネットに関するノート」といった記事も挿絵入りで掲載されている⁶。イエイツはそんな彼からの影響もあって、『鷹の井』では役者にマリオネットのように動くべきであると指定している⁷。

W： しかしベケットが20年代にイエイツの芝居を観たとして、さらにおそらく戯曲集も読んだとして、具体的にはどのようにベケットへの影響がみて取れるのか。

M： そうだね、能との関連を始め、実に色々と考えられるのだが、それに関してはK・ワースの『ヨーロッパのアイランド演劇 - イエイツからベケットへ』に詳しいので、そちらを参照していただくとして⁸、たとえばイエイツのいくつかの芝居における室内の裸の空間だね。あの装飾性の排除は、ベケットに通ずるものがあるね。ベケットは、アメリカのベケット演出家アラン・シュナイダーに宛てた57年12月29日付の書簡の中でも「芝居の状況と問題の極端な簡潔性」を大切にしよう述べているけれ

⁴ Leeper, Janet.
Edward Gordon Craig. Designs for the Theatre. Harmondsworth: Penguin Books, 1948.

⁵ Craig, E. G.. Bookplates. Surrey: Hackbridge, 1900.

⁶ Craig, E. G.. "A Note on Japanese Marionettes, by Gordon Craig". The Mask, (May 1915): 104-07.

⁷ Yeats, W. B..
At the Hawk's Well. 1917. Rpt.
The Collected Works of W. B. Yeats: Plays and Controversies. Tokyo: Hon-no-tomosha, 1990, p. 340.

⁸ Worth, Katherine. The Irish Drama of Europe from Yeats to Beckett. Atlantic Highlands: Humanities Press, 1978. See also Worth, "Yeats and the French Drama". Modern Drama 8 (1966): 382-91.

ども⁹、これはまさにイエイツの芝居に通底するものがあるように思う。

W： マリオネット関連で他に図書館でなにか見つけたのかな？

M： 『仮面とマリオネット』という著書がJ・S・ケナードにあって¹⁰、それが本館書庫に所蔵されているので、早速取り寄せて見てみた。図書館のものは60年代の復刻版で、初版は1935年にロンドンで出版されている。この書物は後半はもっぱらイタリアのマリオネットがどのようにヨーロッパに伝播していったかの歴史的研究だが、このような書物が30年代に出版されていることは興味深い。ぼくはG・ハラップから出版されている『人形とパペット』という書物をもっているけれど¹¹、これが32年の出版だ。この書物はドイツ語からの翻訳でジョージ・バーナード・ショーの序文が掲載されている。このショーの序文はローマのテアトロ・デイ・ピッコリのマリオネット使いであるヴィットリオ・ポドレッカ（写真9参照）に宛てた書簡がもとになっている。面白いのはこの劇団の名がベケットの「ダンテ... ブルーノ」の冒頭でも言及されているのだ¹²。この批評が29年の刊行だから、なにかパペットの時代的な流行というものが20 - 30年代頃には存在したのかもしれない¹³。また29年には林文庫所蔵のデュシャルトルの『イタリアの喜劇』の英訳がハラップから出版されている¹⁴。この書物の存在は山口昌男の『道化の民族学』で知ったのだが¹⁵、そこでも第十一章は短いものだがマリオネットに関する章なのだ。日本でも例えば南江二郎の『人形劇の研究』が原始社から28年に出版されている。しかし

⁹ Beckett, *Disjecta*, p. 109.

¹⁰ Kennard, J. S., *Masks and Marionettes*. London: Macmillan, 1935.

¹¹ Boehn, M. von. *Dolls and Puppets*. Translated by Josephine Nicoll. With a Note on Puppets by George Bernard Shaw. London: George G. Harrap, 1932.

¹² Beckett, "Dante. . . Bruno. Vico. . . Joyce", p. 3. 岡室美奈子氏のご教示による。なお彼のピッコリ人形劇団は1923年に英国を訪れ、それ以降何度か英国国民の前に姿を表している。See Speaight, George. *The History of the English Puppet Theatre*. Second Edition. London: Robert Hale, 1990, p.268. First Edition 1955.

¹³ For example, McCabe, L. R., "The Marionette Revival". *The Theatre Magazine*. November, 1920.

¹⁴ Duchartre, P. L., *The Italian Comedy. The Improvisation, Scenarios, Lives, Attributes, Portraits, and Masks of the Illustrious Characters of the Commedia dell'Arte*. Authorized Translation from the French by R. T. Weavers. London: George G. Harrap, 1929.

¹⁵ 山口昌男『道化の民族学』（ちくま学芸文庫、1993年）。初版1975年、新潮社。

一番驚いたのは第一の対話でも触れた、雑誌『トランジション』を主催していたユージン・ジョラス編集の『垂直派』という1941年にニューヨークで出版された書物の所蔵を和泉に発見したときだ。「小川美彦先生舊蔵」と印のある書物だ¹⁶。いやあ、この先生の旧蔵本にもお世話になったよ。あのベケットのジョイス論の初版も、J・M・シング生誕百年の1971年出版のシング論も¹⁷、イエイツの弟で、世界的に有名な画家で、ベケットとも親交を持ち、小説や芝居も書いたジャック・B・イエイツの伝記も先生の旧蔵本だった¹⁸。このような書物を図書館の蔵書を通して今自分が読めるということは山口(だった、と思うのだが)のいう「精神のリレー」を実感するね。

W: なるほど。精神のリレーか。いい言葉だね。ところで、その『垂直派』という書物はどんな本なのかな。

M: ジョルジュ・バタイユを始め、アポリネール、アンドレ・マッソン、レオン・ポール・ファルグ、ジョルジュ・デュテュイなど、錚々たるメンバーが寄稿している。みなベケットと関連の深い20世紀の芸術家や批評家たちだ。その中に混じってドイツ・ロマン派のクライストの作品が掲載されている。それがなんと、かの「マリオネット劇場について」の翻訳なのだ。このエッセイの翻訳は20、30年代にも出ている。(TLSに掲載されたG・スピーエイトの書誌情報とパウハウスに関する記事は¹⁹、短いながらも実に刺激的だ。一読を薦めたいね。)ベケットはJ・ノウルソンに、この作品をドイツ語で読んだことを76年BBCでの『幽霊トリオ』制作中に述べたと伝えられているが²⁰、この書物は、ベケットの友人ジョラスが編

¹⁶ Jolas, Eugene, ed. *Vertical-A Yearbook for Romantic-Mystic Ascensions*. New York: The Gotham BookMart, 1941.

¹⁷ Bushuri, S. B. (ed.). *Sunshine and the Moon's Delight. A Centenary Tribute to John Millington Synge 1871-1909*. Gerrards Cross: Colin Smythe & The American University of Beirut, 1971.

¹⁸ Pyle, Hilary. *Jack B. Yeats. A Biography*. London: Routledge & Kegan Paul, 1970.

¹⁹ *Times Literary Supplement*, 27 October, 1978, p. 1260; letter from George Speaight.

²⁰ Knowlson, James, and John Pilling. *Frescoes of the Skull: The Later Prose and Drama of Samuel Beckett*. New York: Grove Press, 1979. Rpt. 1980, p. 277.

集、翻訳をしていることといい、ベケットと関連の深い作家たちが寄稿しているだけに何か臭う。最も彼はこの書物の存在は知らなかったようだが。

W： すこし気にはなるね。でもベケットはすでに『マーフィー』の中で、マーフィー以外の登場人物を「人形」(puppet)に見立てていた筈だよ²¹。

M： その通り。だからこそ時代としてのパペットの流行が考えられるのではないかという推測が生まれるのだ。O・シュレンマーらの『バウハウスの舞台』がミュンヘンで上梓されるのも25年だしね²²。

W： なるほど。では今後の研究の進展に期待するとしよう。

3 ベケットとモダニズム

W： さきほどイエイツが話題に出たが、イエイツとパウンド、さらにはフェノロサとの関連ではどうだろうか。

M： これがまた大ありなのだ。ベケットはパウンドを34年、雑誌『ブックマン』で論じている¹。ロンドンのフェイバーから出たパウンドのエッセイ集『新しくせよ』の書評なのだが²、面白いことに、その中でフェノロサの『漢字考』に触れているのだ³。

W： ベケットが？ 34年に？ たしかパウンド＝フェノロサの『詩の媒体としての漢字考』がロンドンのスタンリー・ノット社から出版されるのは1936年の筈だよ⁴。

M： そう。なのにベケットは34年の時点ですでに言及している。この書物は時々ロンドンの古書目録などにも載ることがあるが、大体2万円以上

²¹Beckett, Murphy, p. 122.

²²Schlemmer, Oskar, et al. Die Bühne im Bauhaus. München: Albert Langen Verlag, 1925. Rpt. Mainz: Florian Kupferberg, 1965.

¹Beckett, Disjecta, pp. 77-79.

²Pound, Ezra. Make It New. Essays by Ezra Pound. London: Faber and Faber, 1934.

³Beckett, Disjecta, p. 77.

⁴Fenollosa, Ernest, and Ezra Pound.

The Chinese Written Character as a Medium for Poetry. Foreword and Notes by Ezra Pound. London: Stanley Nott, 1936.

の値が付いている。安いと言えば実に安いのだが、それ以外にも色々と購入しなければならない書物があって、思い切って買えずにきてしまった。

W： よくあることだ。では読まずじまいか？

M： もちろんそんなことはない。これはかつて高田美一氏によって東京美術から翻訳と解説、それに原文を掲載したものが出版されて、現在では品切だが、和泉に一冊所蔵されている⁵。

W： ははあ。

M： ぼくはこの書物の重要性を由良君美の『読書狂言綺語抄』で知った⁶。

W： ぼくも彼の書物の愛読者だよ。特に以前青土社から出ていた「みみずく通信」のシリーズは面白かった。彼の本は最近少しずつ古書店でも見かけるようになったけれど、このシリーズはあまり見かけないように思うが。

M： ぼくも注意して探しているのだが、なかなか見つからない。おそらく彼の愛読者はビブロマニアが多いとぼくは睨んでいる。だから手放さないのではないか。彼の書物論は刺激的だね。ぜひ青土社なり、それが無理ならどこかの出版社から復刻してほしいものだ。「あとがき」によると、『読書狂言綺語抄』は『図書新聞』に連載したものをいくつか纏めて一冊の書物にされたようが、その際多くの図版が犠牲になってしまった、その図版の選定にこそ著者の努力が傾注されていたのに、と嘆いておられる。さぞ残念だったろうね。ところで先程のスタンリー・ノットの件だが、ベケットは同年、つまり1936年に友人ジョージ・リーヴィーの経営するヨーロッパ・プレスとスタンリー・ノットとの提携でP・エリュアールの詩集の翻訳を友人との共同訳で出していたりする⁷。

W： なるほど、ある種のネットワークが形成されている感じだね。

⁵高田美一編訳『詩の媒体としての漢字考』（東京美術、1982年）。

⁶由良君美『読書狂言綺語抄』（沖積社、1987年）。特に「アーネスト・フェノロサと漢字美学」を参照。

⁷Eluard, Paul. *Thorns of Thunder. Selected Poems*. With a Drawing by Pablo Picasso. Edited by George Reavey. Translated from French by Samuel Beckett, Denis Devlin, David Gascoyne, Eugene Jolas, Man Ray, George Reavey and Ruthen Todd. London: Europa Press & Stanley Nott, N. D. [1936].

M： そう。

W： でもどうしてベケットは『漢字考』が出版される以前にこの存在を知っていたのだろうか？

M： 当然その疑問が湧くよね。そこでパウンドの書誌で調べてみると、このフェノロサの遺稿は**1919**年の時点でパウンドの関係した雑誌『リトル・レヴュー』に計四回にわたって掲載されている⁸。さらに**1920**年にはニューヨークで『煽動』という書名のもとに書物として出版されてもいる⁹。ベケットはおそらく雑誌の方でその存在を知ったのではないかと思う。この雑誌はパリでも出版されていて、ベケットがエコール・ノルマルで英語講師として二年間をパリで過ごす間に廃刊になっている。それともう一つの可能性としてジャック・イエイツを通して知った可能性も考えられる。ベケットのパウンド批評が先程も言ったように**34**年。ベケットがジャックと知り合いになるのが**30**年の暮れだ¹⁰。そして、ここが重要なのだが、そのイエイツの個人蔵書には『リトル・レヴュー』が**17**年から**21**年まで所蔵されていたのだ¹¹。したがって彼の蔵書を通して、あるいはジャック本人からフェノロサの存在を知った可能性が考えられる。あるいはさらにもう一つの可能性として、次のようなことも考えてみる価値がある。ベケットが一体いつジョイスの『ユリシーズ』を読んだのかという問題と関係するのだが、『ユリシーズ』の初版がパリで出版されるのが**1922**年¹²。ベケットの「ダンテ．．．ブルーノ・ヴィーコ．．．ジョイス」が出版されるのが**1929**年。それまでには他の出版社からも出ているので¹³、おそらく

⁸Gallup, Donald. Ezra Pound. A Bibliography. Charlottesville: The University Press of Virginia, 1983, pp. 257-59.

⁹Pound, Ezra.

Instigations of Ezra Pound. Together with an Essay on the Chinese Written Character by Ernest Fenollosa. New York: Boni and Liveright, 1920.

¹⁰Armstrong, Gordon S.. Samuel Beckett, W. B. Yeats, and Jack Yeats: Images and Words. Lewisburg: Bucknell University Press, 1990, p. 160.

¹¹McGuinness, Nora A.. The Literary Universe of Jack B. Yeats. Washington, D. C.: Catholic University Press, 1992, p. 258.

¹²Joyce, James: Ulysses. Paris: Shakespeare and Company, 1922.

¹³Joyce, James: Ulysses. London: The Egoist Press, 1922. See Slocum, and Cahoon. A Bibliography of James Joyce, pp. 26-27.

それらのエディションの一つで読んだのだろうけれども、ただし次のことは注目すべきことであると思う。つまり先程の『リトル・レヴュー』だけれども、その1919年には計10回に渡って『ユリシーズ』が連続掲載されているのだ¹⁴。したがってベケットとジョイスとフェノロサを結ぶ媒体としてこの『リトル・レヴュー』の存在が考えられるということなのだ。

W： ふむ。でもそれがイエイツとベケットとの関係に何か関連してくるのだろうか？

M： 大ありだ。というのもパウンド＝フェノロサの『高貴なる日本の演劇』がイエイツの序文を付してダブリンのクアラ・プレスから350部限定で出版されるのが1916年9月¹⁵。それが翌17年マクミランより翻訳作品数をさらに増やして『能または芸能 - 日本の古典芝居の研究』として出版される¹⁶。もしベケットが『リトル・レヴュー』に関心を抱いていたとすれば、ジョイスを経由してフェノロサ＝パウンドの『漢字考』に関心がゆき、さらには二人の共同作業ともいえる能の翻訳・紹介にも関心が広がっていても当然ではないか。

W： で、ベケットはそれらをどれか読んでいたのだろう、と？

M： 残念ながらそのような証拠はまだつかんでいない。しかし以上のような状況証拠から考えると、彼がジャックの兄W・B・イエイツを経由して無意識裡にもせよ、能に影響を受けて作劇を行ったことは十分あり得ることだ。それにベケットは学生時代ダブリンのアベイ座にしばしば足を運んでイエイツの芝居を何度か見ているのだから、それらを通して彼が能を受容したことは十分考えられる。このあたりのことは『明大教養論集』に発表した拙論 '**A Historical Perspective of Samuel Beckett's Theatre**' の

¹⁴ Slocum, and Cahoon. A Bibliography of James Joyce, pp. 97-98.

¹⁵ Fenollosa, Ernest.

Certain Noble Plays of Japan: From the Manuscripts of Ernest Fenollosa, Chosen and Finished by Ezra Pound, with an Introduction by William Butler Yeats.

Dundrum: Cuala Press, 1916.

¹⁶ _____, and Ezra Pound.

'Noh' or Accomplishment: A Study of the Classical Stage of Japan. London: Macmillan. 1916 [1917].

中でも少し触れておいたので、参照していただけるとありがたい¹⁷。

W： ベケットと能 といえば高橋康也氏が思い浮かぶが¹⁸、きみの発言で目新しいところはあるのかな？

M： そうだね、もしあるとすればそれをヨーロッパのモダニズムとの関連で考えてみようということだろうか。それとベケットがフェノロサに触れているという指摘はまだないはずだ。

W： そうか。ヨーロッパの学者にとってみれば、あまり能などには関心がないかもしれないからね。

M： そんなことはないさ。たとえばアーサー・ウェイリーというすぐれた東洋学者がいるね。かれは**1921**年にロンドンで『日本の能』という翻訳を上梓している¹⁹。フロンティスピースに能面の写真が置かれている。能舞台の平面図もある。したがってイエイツは能を直接観ることはできなかったにせよ、当時のヨーロッパ文化の中でも想像力を駆使して能をイメージすることは可能であったと思われる。『マスク』にも能を紹介した記事が掲載されているし、能舞台を絵入りで説明したり、マリー・ストウプスの『古き日本の芝居 - 能』が**1913**年にロンドンで出版されているが、その書評が掲載されたりもしている。この雑誌をジャック・イエイツが所蔵していたということも判明している²⁰。だからヨーロッパの学者や文化人が能に関心がないと見るのは間違いだ。いずれにせよ**1916**年にイエイツが『鷹の井』を創作したとき、そうした文化状況にあったわけで、そのリヴァイヴァルを観ているベケットに能の影響が無いわけがない、というのが目下の結論ということだね。

¹⁷Inoue, Yoshiyuki. "A Historical Perspective of Samuel Beckett's Theatre." 『明治大学教養論集』1997年1月 79 - 100頁。

¹⁸高橋康也「ベケットと能」『世界』（岩波書店、1982年）5月号、226 - 38頁。See also Takahashi, Yasunari. "Qu'est-ce qui arrive? Some Structural Comparisons of Beckett's Plays and Nôh". M. Beja, S. E. Gontarski, and P. Astier, (eds.). Samuel Beckett: Humanistic Perspectives. Columbus: Ohio State University Press, 1983, pp. 99-106, and Kenner, Samuel Beckett, New Edition, p.137n1.

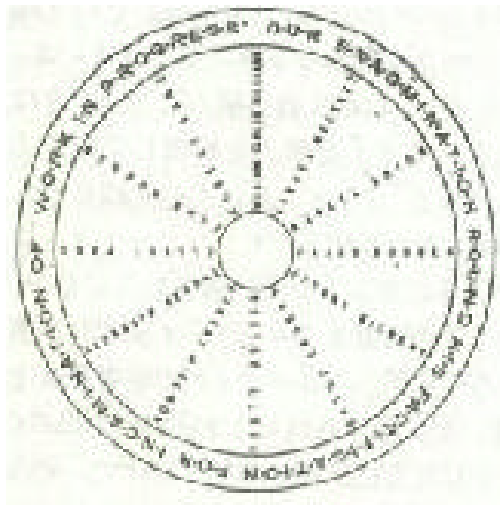
¹⁹Waley, Arthur. The Nô Plays of Japan. With Letters by Oswald Sickert. London: George Allen and Unwin, 1921. Second Impression 1950.

²⁰McGuinness, The Literary Universe of Jack B. Yeats, p. 257.

W： ふむ。まあベケットは『しあわせな日々』の中にも『鷹の井』からの引用を織り込んだりしているそうだしね²¹。あり得るかもしれないね。

M： そうだよ。その他、生田保存書庫にはウェイリー訳の『源氏物語』の初版や²²、イエイツも読んだとされる中国の絵画に関する研究書も保管されている²³。嬉しい限りだ。

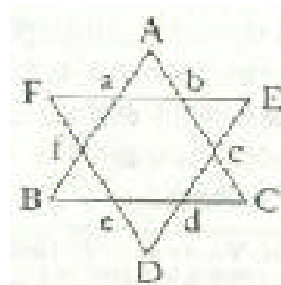
W： なるほど。研究はますます熱を帯びてゆく、という訳か。まあ頑張ってくれたまえ。



図版1
ベケット「ダンテ...ブルーノ・ヴィーコ..ジョイス」が掲載された『フィネガンズ・ウェイク』論集の初版。同心円に注目。



図版2
テトラクティスの三角形。



図版3
ベケット「二つの欲求」より。

²¹ Beckett, Samuel. Happy Days. New York: Grove Press, 1961, p. 58.

²² Waley, Arthur, (trans., intro., and annot.). The Tale of Genji by Lady Murasaki. In Six Volumes. London: George Allen and Unwin, 1925-1933.

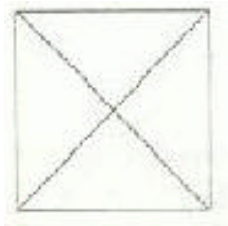
²³ _____. An Introduction to the Study of Chinese Painting. London: Ernest Benn, 1923. Rpt. New York: AMS, 1974.



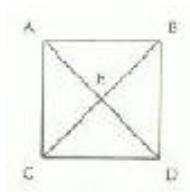
図版4
バーネット『ギリシャ哲学』より



図版5
箱崎『カバラ ユダヤ神秘主義思想の系譜』より



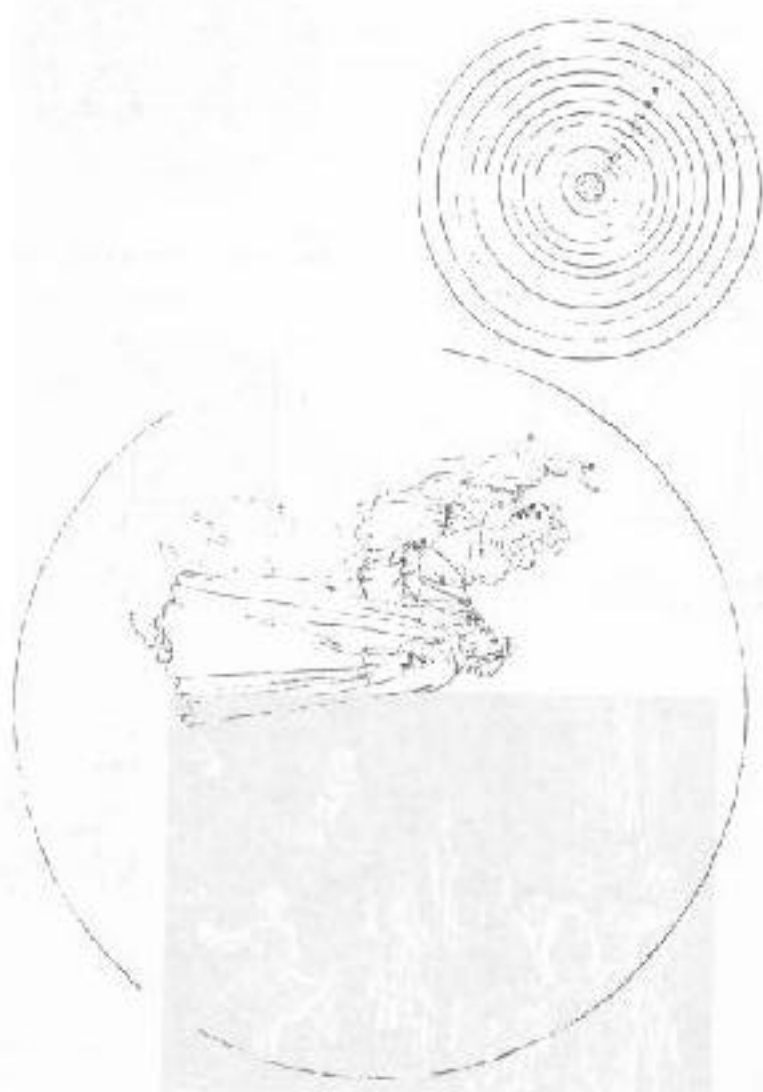
図版6
コーンフォード『プラトンのコスモロジー』より



図版7
ベケット『クワッド』より



写真9
テアトロ・デイ・ピッコリ
の人形と人形使いヴィット
リオ・ボドレッカ。ペーン
『人形とバベット』より。



図版 8

ボツチチエリ『神曲 天国篇』挿絵より。リッゾマン編、ベルリン、1986年刊。同心円に注目。